

小腸がん（十二指腸がん・空腸がん・回腸がん）

小腸について

小腸は、胃と大腸の間にある消化管で、長さは約6~7メートルにも及ぶ細長い臓器です。小腸は、さらに十二指腸、空腸、回腸の3つの部分に分けられます。

十二指腸: 胃から送られてきた食物を、胆汁や膵液と混ぜ合わせる最初の部分です。

空腸: 栄養素の消化と吸収の大部分を担う部分です。

回腸: 栄養素の吸収の最終段階を担い、大腸へと内容物を送る部分です。

小腸は、食べ物から栄養素を吸収し、体に必要なエネルギーや成分を供給する重要な役割を担っています。

小腸がん（十二指腸がん・空腸がん・回腸がん）

小腸がんには神経内分泌腫瘍、腺がん、悪性リンパ腫、肉腫（GIST、平滑筋肉腫等）などがありますが、ここでは小腸腺癌について解説します。

症状について

小腸がんの症状としては、腹痛や吐き気・嘔吐といった腸の狭窄（腸閉塞）に伴う症状が現れることが多いです。また、貧血や血便（赤色や黒っぽい便）が見られる場合、消化管からの出血が疑われます。健康診断での便潜血検査が陽性となり、がんが発見されるケースもあります。ただし、早期の小腸がんでは症状が現れないことも少なくありません。十二指腸にがんができる場合はさらに、胆汁の出口を塞いでしまうことで黄疸を来すこともあります。

診断について

小腸がんの診断は以下の方法を組み合わせて行われます。

1. 内視鏡検査

- ・ **上部内視鏡（胃カメラ）・下部内視鏡（大腸カメラ）**
胃カメラは十二指腸の検査、大腸カメラは一部の回腸の検査に用います。
- ・ **小腸内視鏡**
小腸は非常に長く上部・下部内視鏡では観察できない部分が多いので、下記の検査を併用します。
 - ・ **カプセル内視鏡:** カプセル型カメラを飲み込み、小腸の内部の撮影を行います。
 - ・ **ダブルバルーン内視鏡:** 口または肛門から挿入し小腸を詳細に観察・撮影し、確定診断のための組織採取を行います。

2. 画像検査

CT 検査、MRI 検査、PET 検査によってがんの位置や広がり、他の臓器への転移を確認します。

3. 血液検査

貧血や腫瘍マーカー（CEA や CA19-9 等）の異常を確認します。

4. 注腸検査

バリウムなどの造影剤を使用して、小腸の狭窄やがんの大きさや位置、広がりを確認します。

5. 病理検査

内視鏡により採取された組織の一部を用い確定診断を行います。

治療について

小腸がんの治療法は、がんの進行度や患者の全身状態によって異なります。主な治療法には以下があります

1. 手術治療

手術で切除できる範囲のがんが対象となり根治を目指します。腫瘍の大きさや場所によっては、周囲の組織やリンパ節も一緒に除去することがあります。手術方法には、開腹手術と腹腔鏡手術の二つがあり、腫瘍の大きさやリスクの評価に基づいて選択されます

2. 化学療法

手術が難しい場合や手術後の再発に対して行われます。FOLFOX 療法などが使用されます。

3. 放射線療法

放射線療法は、小腸がん治療においてはあまり一般的ではありません。しかし、転移や再発によって症状が強い場合や、化学療法と併用する場合があります。

執筆者

- 氏名： 飯田 忠
 - 所属医療機関： 名古屋大学医学部附属病院
 - 診療科： 光学医療診療部
-
- 氏名： 中村 正直
 - 所属医療機関： 名古屋大学医学部附属病院
 - 診療科： 光学医療診療部